

司式:大谷 昌恵
奏楽:橋本恵美子

前奏:「おお、汚れなき神の小羊よ」(J.S. バッハ)

招詞:主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに。
主に立ち帰るならば、主は隣れんでくださる。(イザ 55. 6, 7b)

讃美歌: 12「とうときわが神よ」

交読 詩 12:1-8

- 01 【指揮者によって。第八調。賛歌。ダビデの詩。】
02 主よ、お救いください。主の慈しみに生きる人は絶え/人の子らの中から/信仰のある人は消え去りました。
03 人は友に向かって偽りを言い/滑らかな唇、二心をもって話します。
04 主よ、すべて滅ぼしてください/滑らかな唇と威張って語る舌を。
05 彼らは言います。「舌によって力を振るおう。自分の唇は自分のためだ。わたしたちに主人などはない。」
06 主は言われます。「虐げに苦しむ者と/呻いている貧しい者のために/今、わたしは立ち上がり/彼らがあえぎ望む救いを与えよう。」
07 主の仰せは清い。土の炉で七たび練り清めた銀。
08 主よ、あなたはその仰せを守り/この代からとこしえに至るまで/わたしたちを見守ってくださいます。
09 主に逆らう者は勝手にふるまいます/人の子らの中に/卑しむべきことがもてはやされるこのとき。

朗読聖書①イザヤ書 53:10-12

- 10 病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ/彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは/彼の手によって成し遂げられる。
11 彼は自らの苦しみの実りを見/それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために/彼らの罪を自ら負った。
12 それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし/彼は戦利品としておびたしい人を受け。彼が自らをなげうち、死んで/罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い/背いた者のために執り成しをしたのは/この人であった。

朗読聖書②マタイによる福音書 20:20-28

◆ヤコブとヨハネの母の願い

- 20 そのとき、ゼバダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。
21 イエスが、「何が望みか」と言われると、彼女は言った。「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください。」
22 イエスはお答えになった。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか。」二人が、「できます」と言うと、
23 イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右と左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、わたしの父によって定められた人々に許されるのだ。」
24 ほかの十人の者はこれを聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた。
25 そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。
26 しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、

27 いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。

28 人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

祈祷

聖なる主なる神さま、聖名を崇め賛美致します。受難節第4 主日のこの朝も、私たちに目覚めと健康を与え、夫々の生活の場からこの礼拝堂へ、あるいはオンライン礼拝の場へと呼び集めてくださいましたこと、心より感謝致します。

3月も半ばとなり、春の訪れの近さを感じますが、まだ真冬のような寒い日もあります。その中で健康を守られていること、そして夫々がこの主日の礼拝に出席するために、週日の歩みを整えられていることに重ねて感謝致します。

先週の水曜日3月11日には、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所の事故から15年を迎えました。どれだけ年月が過ぎようとも、愛する人を失い、故郷を失った人々の心の傷は癒えることがありません。今もなお、悲しみ、苦しみの中にある方々のことを思います。被災地から離れた場所にいる私たちが、これからも末永く支援を続けていくことができますように、そして被災された方々に寄り添い続けていくことができますように、神さま、お導きください。またその後も度々起きている様々な災害被災地のことも覚え祈りを合わせていくことができますようにと願います。

神さま、世界は今、混沌とした中に置かれています。正義の名のもとに罪のない人々の血が流され、たくさんの方が日常生活を奪われて嘆きの中にいます。あなたが造ってくださった大地が悲しみの叫びをあげています。神さま、どうか1日も早く、平和がこの大地に訪れますようにと祈ります。そのために政治を司る世界の指導者たちに必要な知恵をあなたがお与えくださいますように。特に子供たちから笑顔を奪うような悲しみがなくなりましますようにと祈ります。

神さま、今日は笠原義久牧師が御言葉の取次をしてくださいます。この礼拝のためにこの牧師をお与えくださったことに感謝いたします。どうぞ、笠原先生を、聖霊で豊かに充たし、思いのままに御言葉を語ることができますようにお導きください。また聞く私たちの心を整え、御言葉を迎え入れることができるようにしてください。

今日この礼拝に出席した人も、その思いが叶わない方が多くいらっしゃいます。心と体に弱さを覚えている方、お歳を召して体の自由が利かなくなつた方、そのような方の介護に当たる方など、皆、夫々の痛みを抱えております。どうぞそのような方々の上にも、今ここにいる私たちと同じ祝福とお恵みをお注ぎください。

今日、日本中、世界中の教会で献げられます礼拝の上に、あなたからの豊かな祝福がありますように。

この感謝と願いの祈り、救い主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げ致します。アーメン。

讃美歌 298「ああ主は誰がため」

講壇「相互に僕となる」

笠原 義久

受難節の時の中に置かれている今、マタイ福音書の今朝の個所は、私たちへの切なる招きの言葉として迫って来ます。

この個所を、私たちは、直前に置かれているイエスの三回目の受難予告の記事と切り離して読むことはできません。マタイ福音書にだけに記され

ている特徴的なことを挙げてみたいと思います。

「十二人の弟子だけを(脇に)呼び寄せて(20:17)」、つまり「ひそかに」、しかも「エルサレムに上って行く途中」で彼らに言われる。この“ひそかに”、しかも“途中で”という表現はマタイ独自のものです。“ひそかに”というのは“耳打ちするような距離で”ということでしょう。心の奥底にある重大な秘密、絶対に他人には譲れない自分ひとりの決意ないし覚悟、自分一人に対してだけ神によって敷かれた道、それを敢えて他人に打ち明けるには、その相手は誰でもよいというわけにはいかないでしょう。

主イエスご自身は、自分が遂げるべき最後についてただ弟子たちだけにだけ、いわば指しで打ち明けられる、それは主イエスの弟子集団への揺るぎない信頼のゆえなのでしょう。主イエスはご自身一人担うべき十字架の苦しみについて、その苦しい定めへの耐えきれずに、弟子たちに秘かにその苦しみの緊張に参与し分担してもらおうべく、それを打ち明けたのでしょうか。そもそも主イエスが、その弟子たちを選び、これをお立てになった理由は何であったのでしょうか。

一つには先ず、何よりも、「自分のそばに置く(マ3:14)」ことであります。そのように福音書は伝えています。“主イエスと共にいる”、この単純なことが主イエスの弟子であることの第一の使命であったのです。『ゲッセマネの園』に於いても、主イエスは三人の弟子たちにそのことを求められました。“主イエスと一緒にいる”こと。しかし弟子たちはどうであったか。

あのパスカルの有名な『パンセ』の中に次のような一節があります。このゲッセマネの園における出来事について触れている箇所です。

しかし彼らは眠っている。彼らがしばし共に耐え忍ぶことを彼は求めたもう。しかし彼らは全く彼をなおざりにする。かくしてイエスは見捨てられ、唯一人神の怒りに対したもう。

更にこうあります。

イエスは世の終わりまで苦悶したもうであろう。その間、我々は眠ってはならない。

“主イエスのこの地上における経験、苦悩、嘆き、悲しみ、憂い、その稀な生と死の全体、全部、それに参与し、それを共有することができる”と、そのように誰が言い得るのでしょうか。しかし主イエスは敢えて自分の定めへの参与を、それに共に与るということを、その十二弟子たちに求められたのです。

さて、弟子たちはしかし、イエスの死の予告を前にして全く別のことを空想していたようです。エルサレムに上ることを彼らは、“いよいよ彼らの夢の実現の時”、そのように空想したようです。ルカ福音書は「弟子たちの無理解(9:45)」と記していますが、マタイの今朝の箇所も正に、この弟子たちの無理解の悲しい現実そのものに、そのことを記していると言えると思います。弟子集団のこの無理解の中であって、主イエスの姿はほとんど無限に孤独です。主イエスはそので既に十字架の苦しみを一人苦しんでおられるように思われます。

“エルサレム上る”ということ“を”栄光の成就、夢の実現の時”と思い込んでいたらしいイエスの弟子たち、彼らはほとんど一様に、そこにおける自分の名誉と権力にのみ関心を抱いていたように思われます。ゼベダイの子らの母がイエスに先ず懇願します。彼女は“イエスのところに来て、ひれ伏し、願う”という、三段階の言わば敬虔な仕草をしています。そのことから、彼女もイエスの弟子の一人であった、そのように言うことができると思います。

私たちはここで、『イエスの十字架の死』、および、その『受難予告』という悲痛にして恐ろしい深みを前にして、ゼベダイの子らの母の抱いた関心が、

このように人間的、世俗的であったということ、そのことに驚かざるを得ません。しかもそのような関心の所在は、一人ゼベダイの子らの母だけではなく、並みいる弟子たち全ての関心であった。そのことは、「この二人の兄弟のことで腹を立てたのは、他の十人の者であった」、そのことによってよく分ります。

ここにはもしかしたら、一番最初の教会の中にさえ存在したに違いない権力抗争の悲しい現実が反映しているのかもしれませんが。聖書の語るところにもう少し接近して考えて見たいと思います。

その母によって代弁された二人の弟子の願望・期待というもの是非常にナイーブなものでしたけれども、その彼らとて、次のような立場に立っていたということは十分に読みとることができると思います。即ち、第一に、“主イエスの弟子として御国のために負うべき務めのあるということを充分自覚していた”ということ。

そして第二に、“神の国、神の支配の全き貫徹することを待望し、その信仰に生きていた”ということ。それゆえ最後まで、“イエスのいと近き所に留まり続けようとしていた”そのことであります。イエスはそのことを咎めたわけではありません。けれどもイエスは彼らの願望の中に、非常に危険を認めました。それは“大きな広がりをもった神の国待望というものを小さな個人的な願望へと曲げて、限りなく質の違ったものへと変えてしまう”、そういう危険であります。“神の国、神の支配というのはこの世の支配者の為すところから類推されるそのような支配とは全く別物である”、“神の御支配というものは、この世の支配者の支配というそういう尺度を打ち壊すものだ”、そういうことであります。

この世の支配者の為す支配の構造というのは、イエスが25節で語っている如くであります。即ち、「異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている」。この世の支配構造というものを実在的に捉えています。ここで「支配する」と訳されている元の言葉(“κατακυριεύω”)は、「主人がその奴隷を扱うような仕方です徹底的、且つ、高圧的に治める」、そのように訳すべき言葉が用いられています。他方、「権力を振るう」(“κατεξουσιάζω”)ということは「押さえつける、権力を恣にする」、あるいは「暴政を敷く」と言い換えてもよい、そういう言葉が使われています。これは正に、特定の人が他の者を文字通り押さえつけることによって成り立つ、そういう関係であります。

二人の弟子はイエスの言う“神の国”の構造というものを、この世の支配構造と同質のもの・同じものとして理解していたのです。イエスこそが最後の時の支配者、イエスのエルサレムへの道はイエスを権力掌握へと導く道、エルサレムへの道は上へ続く道、栄誉、名声、評判、権力へと通じる道であると。彼らは権力を掌握するであろう、イエスに次ぐポストを確約して欲しかったのです。

このような弟子の願望に対するイエスの“否”、“いや違う”、“そうではない”というこのイエスの“否”には、二つの意味が込められています。

一つは、“この世界を規定し動かしている支配構造に対する否”です。神によって、その似姿として創造され、各々等しく尊厳を与えられ、“汝ら自由に生きるべし”と、そのように宣言された人間の間、支配・被支配、そういう関係が存在し、支配する者も、支配される者も共に、創造の時、神の似姿として創造されたその本来的な人間性から疎外されてしまっている、全く違うものになってしまっている、自由ではなく限りない不自由によって支配されている、このような人間の支配の構造に対する“否・no”であります。もっと具体的に言うならば、この“否”は、イエスの時代の支配構造、即ち、“ローマ帝国を頂点とする支配構造に向けられている”と、そのように言うこと

もできます。此処で語られている異邦人の中での「支配者」というのは、「ローマ皇帝、および、ローマの属州の総督などの支配者」のこと、また「偉い人たち」というのは、「エルサレムにあるユダヤ教の神殿を中核とするユダヤの宗教的・政治的権力者」のことを指しているように理解してよいと思います。いずれにしてもイエスの「否」、この「否」は、この世界を規定し動かしている支配構造に対する「否」であります。

このイエスの「否」に込められているもう一つの意味は、「イエスのエルサレムへの道は、上に通じる道、栄誉や名声、権力が約束されている道ではない」ということです。ここではイエスの道についての弟子たちの無理解ということがくっきりと浮き彫りにされます。イエスの此処での言葉を敷衍するとこのようになると思います。

あなたがたは事態が何であるか皆目分かってはいない。あなたがたは最後までこのわたしに従って来ると言うけれども、また栄誉ある二番目のポストを約束して欲しいと言うけれど、わたしが行くのは、わたしを殺す恐ろしい町エルサレムなのだ。エルサレムへの道は、あなたがたが思っているような上への道ではなく、下に降る道、恥辱、不名誉、嘲り、十字架へと通じる道なのだ。この道をわたしと共に歩む用意があなたがたにはあるのか。

これは「弟子たちへの警告の言葉であると同時に招きの言葉である」ことを私たちは聴き逃してはなりません。

まことの神の国、神の御支配を待望する信仰に生きること、それは、個人的な願望、地位、権力、名誉への思いを絶ち切って、イエスのエルサレムへの道を共に歩み行くこと、イエスが飲む盃を飲むということです。あなたがたがわたしの弟子に留まろうとするならそうするべし。

私たちは非常に厳しいですけど、イエスの言葉というものをそのような切なる招きとして聴くように、そのように此処で促されているのではないのでしょうか。

さて、主イエスは言葉を継いで弟子たちの在り様について更に語ります。26節から27節、

あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者となり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。と、

“互いに仕え合う、そういう生への招き”であります。“仕える・奉仕する生への招き”、この“奉仕への招き”が、イエスの受難予告の直後に記されていることには大きな意味があると思います。“受難と奉仕”が切り離し難いものとして語られなければならぬ理由、その根拠は何であるのか、それは28節の言葉、人の子が、仕えられるためには仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。

この言葉です。

“イエスの贖いのための死”、聖書はイエスの死を、“奴隷や捕虜を解放するために支払われる身代金、即ち、贖い”に譬え、更に、「仕えられるためには仕えるため」という語句を加えることによって、“イエスの贖いの死というものが、仕える、奉仕する、そういう命の行きつくところである”と、そのように語っていることです。この両者、即ち、“贖い”ということと、“仕える・奉仕する”という、この両者は“切り離し難い、不可分”、そしてそのことが、この“贖い”ということと“仕える・奉仕する”、この両者が“イエスの生全体を規定している”ということです。イエスはそのことを熟知し“自ら進んでエルサレムに上る、そしてそのイエスの道こそが弟子たちの奉仕する生の根拠であり、また模範である”、此処ではそのように言われているのではないのでしょうか。

この世界を規定し動かしている支配構造に対するイエスの“否”、イエスの“no”、このイエスの“否”は、一方で、この世の権力構造それ自体に向

けられています。言わば外に向かって。しかしそれと同時に、いやそれ以上に内に向けています。

ゼベダイの子らだけではなく、十二弟子たちは尽くこの世の支配構造、支配の論理から招かれてあるのではない。教会もこの世の権力衝動、権力願望から自由にされてはいない。しかしそうであってはならない。人間が人間を支配し、支配する者も支配される者も、共に本来の人間性を貶めるような、そういうことがあってはならない。イエスは弟子たちに明確に語っています。“あなたがたの間で、先ずそのような、支配・被支配という構造に規定されている関係を止め、新しい生活の秩序を築いていくこと、そこからまず始めようではないか。”そのことが言わば外側の構造をも突き崩して行くことに繋がるはずである。私たちは主イエスの言葉をそのように聞くことができるのではないのでしょうか。

この主イエスの招きは、“外の事柄に目を瞑り、つまり教会のそとの事柄ということに目を瞑り、この世の権力構造のあり方を黙認せよと、そういうことではありません。”むしろ人間の尊厳が貶められ、あるべき人間性が損なわれている、その場所、その所に教会が起ち、そのような状況に対して明確な“否”を語り、新しい命の秩序を構築するようと言う招きであります。

仕えること、奉仕への招きは教会に対する招きです。イエスは、「あなたがたの間では(26節)」と語ります。エルサレムへの主イエスの道行きに、教会が与らせて頂くのです。それが教会に与えられた新しい生活の秩序への道、仕え、そして奉仕する道であります。この道は私たち個人、一人ひとりではとても歩き切れる道ではないでしょう。しかし、共に仕え合う関係を築く中から、一人の友垣が背負い込んだ過重な荷を皆で分かち合い合えるような、そういう関係を築く中から、誰一人として損なわれることがないような、そういう関係を築くということの中から初めてこの道を私たちは歩き切ることができる、そういう道ではないのでしょうか。

私たちが他者と苦しみをつかつか、生死を共にするとか、運命を一つにするとか、悲しみに与るとか、そんなことは容易く言えるものではない。人間一人ひとりの悲しみ、生死、運命は、夫々その一人一人に固有のものであって、決して容易く他人が近づけるものではない、共有し得るものでもない。確かにそうあります。しかし、主イエスが敢えて、自分の十字架への道行き、そのために弟子たちが参与することを求められた、自分が仕えるために来られた、それと同じように、私たちが皆に仕える者となるよう、皆の僕となるよう、イエスはここで私たちに求めておられるということ、私たちがそのことを、今、私たちが置かれている受難節の日々、深く心に刻みたいと、そのように願うものであります。祈りを献げます。

神さま、私たちが、あの弟子たちと同じように、利己的な思いと高慢のゆえにしばしば主を忘れ、自らを守るために主を否み、主から遠く離れてあったことをあなたの御前に懺悔いたします。主なる御神、どうかこの受難節の日々、主の十字架に心に向け、主の痛みの前に私たちが跪き、自らを深く顧みる時として過ごさせてください。

主キリストの御名によって祈ります。アーメン。

讚美歌 529「主よ、わが身を」

献金・感謝・主の祈り(吉田淳一)

父なる神さま、主にある兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが許されましたことを感謝致します。説教を通して豊かに御言葉を与えてくださり感謝致します。私たち夫々が招きにより仕える者として皆で分かち合いながら歩むことができますようお導きください。

私たちは必要なものを与えられております。今夫々が与えられた物の中から感謝と献身の徴をもって御前にお献げ致します。どうぞ祝して教会の御用のために用いてください。主が

教えてくださった主の祈りを共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。…『主の祈り』
アーメン。

派遣：讃美歌 90「主よ、来たり、祝したまえ」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の清き親しき交わりとが、永^{とこしなえ}遠にあるように。
アーメン。

報告：チャリティコンサート実施報告ほか

後奏：「イエスの十字架、苦しみと痛み」 (J. G. ワルター)